【京都】京都府下最大、288人のスタッフによる高密度リハビリ-京都大原記念病院「農業とリハビリテーションの融合」とは◆Vol.2

2019年9月16日 (月)配信 m3.com地域版

　農業とリハビリを融合させた「グリーン・ファーム・リハビリテーション（R）」を行う京都大原記念病院（京都市左京区）は、職員、設備ともに京都府下最大の規模を誇る回復期集中型の専門病院。全国から問い合わせが絶えない、高密度・高強度のリハビリについて話を聞いた。
（2019年6月7日インタビュー、計2回連載の2回目）

▼第1回はこちら

　広大な自家菜園で行う「グリーン・ファーム・リハビリテーション（R）」と並び、京都大原記念病院は先進的なリハビリテーション設備でも全国に名を馳せる。よりきめ細かいケアを実現するため、288人ものリハビリスタッフが在籍。医師や看護師と一丸となり治療に当たる。その徹底した体制を、リハビリテーション医学の専門医である、三橋尚志氏にお伺いした。

――広大な菜園にも驚きましたが、スタッフ数が288人とお聞きして、さらにびっくりしました。医師や看護師を合わせた人数ですよね？

　いいえ、理学療法士、作業療法士、言語聴覚士の人数です。近隣にあって協力体制を取っているグループ病院「京都近衛リハビリテーション病院」「御所南リハビリテーションクリニック」などを合わせた総数で、そのうち京都大原記念病院に154人おります。それに加えて医師10人、看護師115人、薬剤師5人。検査技師、レントゲン技師、介護職やソーシャルワーカー、管理栄養士などまで入れると総勢345人です。これら専門領域の多職種がチームを組むことで、より手厚い治療を実現しています。

――病床数はどれくらいあるのですか？

　総数203床のうち、172床が回復期リハビリ病棟です。これは2000年の制度の設立当時、京滋（京都・滋賀）では初で、全国でも最大規模になります。

チームリハビリテーションの要、三橋氏。京都大原記念病院では、常に勉強会を実施してスタッフのスキルをアップデートしている。

――回復期のリハビリに特化しているからこその体制なのですね。

　はい、やはりリハビリは高密度・高強度が結果につながります。数値で言うと、現在のリハビリ提供単位数は7.9単位／日です。もし、この実績を制度で定められている上限の9単位にしようと思うと、患者さん1.3人に対し、スタッフ1人が必要という計算になります。

――一密度高くリハビリを実施しようと思えば、それなりの体制も必要ということですね。

　そうですね。ただ人数を配置すればいいというものでもなく、やはり「質」も問われます。当院ではその点にも自信があります。当院での重症者における退院時の改善割合（日常生活機能評価4点以上）は、60.2%です。

――その高い質の理由は何でしょう。

　常に研修で新しい知識や技術を導入していることと、患者さんへの細かい個別対応です。当院では急性期病院から移ってこられる前に、スタッフが出向いて患者さんの様子を把握します。しっかりと受け入れ体制を作り、その方に最適なプログラムを提供したいからです。

――そこまで気遣っていただいたら、がんばろうって気持ちになります。

　ありがとうございます。地産地消の食事にしても、「グリーン・ファーム・リハビリテーション（R）」にしても、患者さんによいことは、なんでも取り入れようという気持ちから始まったことなんです。患者さんだけでなく、ご家族も慣れないリハビリは不安になることも多いので、何度も密なカンファレンスを行いますし、どのような治療の流れかがわかる、漫画の小冊子も作ってます。

――病気になったらどうしようと思ってましたが、お話を聞いて安心しました。

急性期病院ともしっかり連携してますし、在宅療養しながら質の高いリハビリを受けられる、さまざまな公的支援もたくさんあります。不安なことは、なんでも聞いてください。私たちはそのためにいますから。

◆

最後に、京都大原記念病院が導入している、全国でもまだ数の少ない高度なリハビリテーションについて、垣田院長に話を聞いてみた。専門スタッフを必要とする療法を積極的に取り入れる理由とは何か。そしてその反響とは。

――貴院では「NEURO15 -TMS療法」「ボツリヌス療法＋短期集中リハビリテーション」「LSVT LOUD&BIG」という、先進的な3つの療法を導入されています。これらは取り入れている病院はあまり多くないそうですが。

はい、磁気刺激を用いた「NEURO15 -TMS療法」については、京都では当院だけです。ボツリヌストキシンによって筋肉の緊張を緩和する「ボツリヌス療法」も、全国的に珍しいと思います。さらに、パーキンソン病の障害に効果が期待される「LSVT LOUD&BIG」に関しては、資格試験に合格したスタッフしか施行できないため、導入のハードルはより高くなります。

――それらを導入した理由は何でしょうか。

必要とする患者さんがおられるからです。可能性があるなら、試してみる価値はあります。そのためには勉強も研修も必要ですが、チャレンジすることでスタッフのキャリアアップになります。

――どれも特殊な療法ですが、患者さんの反応はいかがでしょう。

問い合わせがけっこうあります。今はインターネットの時代ですから、他県からも「やってみたい」と来院される患者さんがいらっしゃいます。

先進的な療法を、いち早く取り入れてきた垣田院長。リハビリルーム、食堂、菜園、あらゆる所に自ら赴き、患者さんとの対話を大切にしている。

――「グリーン・ファーム・リハビリテーション（R）」にしても、先進的療法にしても、すごく柔軟に取り入れておられますよね。それぞれ医療としては対極にあるものだと思うのですが、なぜか違和感がなくしっくり来ます。

　大原という、里山の環境ならではでしょうね。そしてもうひとつ、この病院の敷地内に面白いものがありますよ。

――それは何でしょう？

　「京都大原児玉山荘」という、通常は非公開の施設があります。かつて大原を拠点に活躍された、相撲の行司装束や能舞台装束の染色工芸家が、工房として使用されていたものです。現在は当法人が所有しておりまして、春と秋に患者さんとご家族に公開しております。

――そんな素敵な施設が！皆さん、お喜びになるでしょう。

　春は桜、秋は紅葉がきれいなので、とても喜んでいただけます。大原はすぐ東が比叡山で、山の稜線もきれいですよ。池泉回遊式の庭園、「玉響（たまゆら）の庭」も趣がありますので、ぜひ春と秋に当院にご用がありましたら、お見逃しなく。

「京都大原児玉山荘」、秋の紅葉風景。小高い丘の上に上がり、見晴らす大原の里は絶景のひとこと。

【取材・文・撮影＝ライター シライ】